訪問診療・往診専門

医療法人 かさまつ在宅クリニック

【ご自宅で点滴や採血もできます】

徳島市内を中心に、ご自宅での療養を希望される方の訪問診療、往診を専門に行うクリニックです。
医師、看護師が他職種と連携して、365日24時間対応しています。

【小児科医が訪問します】

【当院の理念】

「患者さんの心の声に耳を傾け、患者さんに寄り添う医療を提供します」
「住み慣れた家で過ごせる幸せを実感できる在宅診療を実践します」
「子供から大人まで、家で過ごしたい患者さんの希望を実現します」

【このような患者さんが対象です】

- 通院困難な方、寝たきり状態の方
- がん、難病で自宅療養中の方
- 在宅酸素療法や人工呼吸器治療をされている方
  （気管切開をされている方の管理も可能です）
- 中等度から重度の認知症があり自宅療養中の方
- 脳梗塞後遺症などで経鼻胃管栄養、胃ろう栄養されている方
- 床ずれなどの外科的処置が必要な方

★小児の在宅患者さんも診療します。
★病状の変化があれば、連携病院の主治医と連絡を取りながら治療を進めてまいります。

【費用の目安】

1割負担の患者さんで、医師が1ヶ月に2回訪問診療すると、およそ6,000円になります。（検査・注射・薬代など別途）

【診療範囲】

徳島市内中心その他、小松島市、北島町など、クリニックから車で30分程度の範囲です。

【在支診薬剤師が勤務しています】

- 医師の処方チェック（疑義照会減少）
- 調剤薬局との連携
- 院内薬品の在庫管理
- 退院前カンファレンスへの参加
- 初回往診時の処方履歴の確認など

【コロナ前と現在との比較】

2019年5月～2020年6月まで
- 在宅患者数 154名
- 在宅看取り数 20名

2020年5月～2021年6月まで
- 在宅患者数 237名（1.5倍）
- 在宅看取り数 52名（1.3倍）

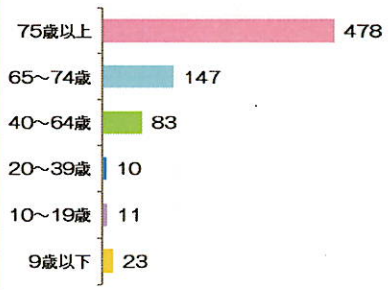
成人疾患別患者数（人）
（2012年10月～2021年7月）

循環器疾患	55
脳血管疾患	64
認知症	55
悪性新生物	353
骨折・筋骨格系疾患	27
糖尿病	4
呼吸器系疾患（COPD以外）	14
COPD	21
神経系疾患（指定難病以外）	1
精神系疾患（統合失調症、うつ病など）	4
脊髄損傷	7
指定難病（神経系）	47
指定難病（神経系以外）	8
膠原病（関節リウマチ、自己免疫疾患など）	8
老衰	7
その他	29
合計	704

小児疾患別患者数（人）
（2012年10月～2021年7月

先天奇形症候群	9
低酸素性虚血性脳症	4
先天性腫瘍	2
先天性心疾患	2
染色体・遺伝子異常	9
難治性てんかん	3
その他	7
合計	36

年齢別患者数（人）
（2012年10月～2021年7月）



〒770-8054　徳島市山城西4丁目13-3
電話：088-679-6393　【受付】月曜日～金曜日（土日祝を除く）　午前9時～午後5時
ホームページ：http://www.kasamatsu-zaitaku.net　Eメール：casa.home.care@gmail.com
フェイスブック：https://www.facebook.com/kasamatsu.zaitaku.clinic/

「入院すると、なかなか会えません」

～在宅緩和ケア・在宅輸血・在宅嚥下検査～

徳島往診クリニック（在宅緩和ケア充実診療所）

在宅緩和ケア充実診療所とは、機能強化型の在宅療養支援診療所の中でも、特に緊急往診・在宅看取りの実績が評価され、オピオイド系鎮痛薬の使用経験に富んだ医療機関です。

【 自宅で提供可能なケア】

1.定期的な訪問診療と訪問看護
2.24時間対応の緊急訪問・電話相談
3.お薬の宅配
4.痛みの緩和
　＊麻薬の使用も問題なく可能
5.在宅酸素療法（人工呼吸・痰の吸引）
6.経管栄養（胃ろう）
7.点滴・中心静脈栄養（ＩＶＨ・ＣＶポート）
8.腹水や胸水の処置・腹膜透析・腎ろう
9. 在宅での入浴等、介護保険の利用
10.病院や施設ホスピスと連携したケア
11.在宅での看取り

輸血が必要な患者様にも
在宅医療をとの思いで、
在宅専門医ならではの
診療と24時間体制の
サポートを実現

2020年に出現した新型コロナウイルスは瞬く間に世界中に蔓延し、その後次々と変異株が生まれています。現在では、重症者用病床の多くが新型コロナ患者用に転用され、軽症・中等症の方は在宅療養を余儀なくされています。そのため、**家庭内感染**の蔓延が目下最大の問題です。そういった状況の中、終末期の患者さんを主に診察している緩和ケア医や在宅医療に深く関わる医師に予期せぬ大きな影響がでました。それは、緩和ケア病棟などに入院をお願いした場合、新型コロナウイルスの院内感染予防のためご家族が**なかなか面会できないということ**です。

緩和ケア病棟には、終末期の方が多く入院されます。残された短い時間のつらさを和らげるには、麻薬のような痛み止めも必要ですが、**家族や友人との面会・会話**といったものもとても大切です。それなのになかなか面会が叶わないことで患者さんは孤独に苛まれ、またご家族が臨終にも立ち会えないといった状況が生じてしまっています。**人生の最期の時間に愛するご家族や友人と会えないことは、とても辛いことです。**しかしながら、終末期を過ごす場所として、緩和ケア病棟や施設に入ることの他に「**ご自宅**」を選択することも可能です。実際、コロナ時代の状況下**最期の場所としてご自宅を敢えて選択する**方が増えています。これまでは、「入院までは必要ないけれど、急に悪くなったらどうしよう」とか「家族の介護が大変だから入院しよう」といった方も多くいらっしゃったことでしょう。しかしながら、「面会困難」という状況下、「思い切って最期まで自宅で過ごそう・過ごさせてあげよう」という選択肢もあることをお示ししたいと思います。そのために、我々在宅専門医や訪問看護師がいるのです。

上記の在宅医療で可能なこと意外に当院では、在宅療養継続を可能にするために以下の取り組みをしています。

1. 在宅輸血：対称となる疾患・骨髄異形成症候群・白血病・悪性リンパ腫・再生不良性貧血・慢性腎不全
　・胃癌、大腸癌、膀胱癌等からの慢性出血・癌の骨転移、化学療法に伴う骨髄抑制などで、頻回の赤血球や血小板の輸血が必要な方にご自宅で輸血しています。

2. 在宅での嚥下機能検査・嚥下リハビリテーション
　耳鼻科の専門医がご自宅に訪問して、内視鏡により嚥下機能の検査をします。夜になると熱が出たり、痰が増える。こういった方は、気づかないうちに誤嚥している可能性がありますので、嚥下内視鏡検査の適応があります。脳梗塞等で食べられなくなり胃瘻から経管栄養中の方でも、嚥下内視鏡検査と嚥下リハビリテーションを組み合わせれば、またお口から食べられるようになる可能性があります。ご本人にもご家族にとっても、口から食べられないことはとてもつらいことです。ご家族や施設職員の方が安心して食事介助できるよう、「検査結果に基づいた食べさせ方」のアドバイスを致します。

在宅緩和ケアに専門的に関わる施設へのアンケート調査で、がんの終末期患者さんの在宅療養期間は**わずか30日**に過ぎないということが判りました。このことは、患者側の「自宅で長い間寝たきりになったりしたら、家族に大きな迷惑をかけてしまう」、あるいは家族側の「ホントに最後まで介護ができるのだろうか」といった心配を軽くしてくれます。**つまり、最期の30日を頑張れば、充実した人生の終わりをご家族と共に迎えられる・過ごさせてあげられると言えるからです。**

もちろん、入院したら完全に面会禁止とは限らず、友人は不可でも家族の中の一部の方だけの短時間の面会を認めている施設もありますし、TV電話を使った面会を可能にしている施設もありますので、「どうしてもこれ以上は、自宅で介護することはできない」といった場合には、いつでも入院可能です。

新型コロナウイルスは、我々の日常を変えてしまいました。ポストコロナの時代、**在宅緩和ケア**は以前よりその意義を増し、**在宅緩和ケア**に携わる我々は身の引き締まる思いで一杯です。

コロナ禍における緩和ケアについて

コロナ禍が世の中を席巻して、久しくなる。社会の仕組み自体が変革を余儀なくされており、大きなパラダイムシフトが起こっている。緩和ケアの分野においても例外ではなく、これまで、病院、ホスピスにて、緩和ケアを受けることができていた方が、ご自宅にて、緩和ケアを受けるため、帰宅の途を取ることがある。面会が十分にできないことが一因と思われる。

トータルペインという概念がある。中でも、精神的苦痛の緩和には、人間が関係性の存在である以上、人と人との会話が、本質的に重要な意義を持つ。家族であれ、医療従事者であれ、介護従事者であれ、通りすがりの人であれ、その相手が誰であれ、ふとしたことで、人は救われたような気持ちになったり、立ち上がれないほどのつらさを担ったりする。

EBM（Evidence-Based Medicine）に対し、NBM（Narrative-Based Medicine）という考え方がある。NBMとは、①「患者が主観的に体験する物語」を全面的に尊重し、医療者と患者との対話を通じて、新しい物語を共同構築していくことを重視する医療、②病いを、患者の人生という大きな物語の中で展開する一つの「物語」であるとみなし、患者を「物語を語る主体」として尊重する一方で、医学的な疾患概念や治療法もあくまでも一つの「医療者側の物語」と捉え、さらに治療とは両者の物語をすり合わせる中から「新たな物語」を創り出していくプロセスであると考える医療、とされている。

作家の谷川俊太郎は、以下のようにも、言っている。
「西洋医学でも、『ナラティブ・ベイスト・メディスン』なんて言葉が出てきているみたいだけど、もっと普通の話なんだよね。みんな難しい名前が付いちゃうのがすごくおかしい。西洋の学問体系にとらわれなくていいから、患者と話すときには普通の言葉を使ってほしい。そうすれば、『この医者とだったら話が通じるな』と患者とのいい関係も築いていけるんじゃないのかな」

以下は、ある、癌末期の女性患者と訪問看護師との会話の一部である。
「娘は今年受験ではじめは県外の大学に行く予定だったけど、県内で家から通える所を受験してくれることになった。多分、私の体のことがあるからと思う。この病気になっていいとは思わなかったけど、悪いことばっかりでもないんかなって。ほんまに自分の大切なものが分かったし、新たにいい人との出会いもあったし。子供たちにも優しくできるようになったし。ほんまは、かかりたくなかったけどな。でもいい方に考えるようにしてます。」

不治の病を持つ患者との間で、このような会話を交わすには、看護師が、日常のケアの中で、無意識に、NBMを行っていたことによるものと思われるが、当時の私は、その女性患者の心のありように、言葉を失ってしまったことを覚えている。

コロナ禍において、人々の価値観が急速に変わりつつある今、EBMに加え、NBMを真摯に実践していくことで、患者と医療者は、人同士の支え合いの関係を築けるのかもしれない。

あすなろ診療所　上原康三

コロナ禍においても

がんで療養中の方へ ご自宅で過ごす際の 治療や介護に関することなど 様々なご相談に応じています

一般社団法人徳島市医師会

徳島市医師会では、在宅医療や介護の相談窓口として『徳島市在宅医療支援センター』を設置しております。徳島市在宅医療支援センターは、市民の皆さまから在宅医療や介護に関する一般相談に対応するとともに、高齢者を支える多職種（医師・歯科医師・薬剤師・看護師・ケアマネジャーなど）の連携を促進するための活動を行っています。

がん治療に伴う苦痛やつらさ（痛みや吐き気、倦怠感、心のつらさなど）をやわらげる治療=緩和ケアについて知りたい

往診してくれる眼科や耳鼻咽喉科等の医師を紹介してほしい

徳島市在宅医療支援センター

介護などの支援が必要な場合は、**徳島市地域包括支援センター**と連携しています

相談専用フリーダイヤル / 0120-65-3960

《平日（月～金曜）9:00～17:15　※祝日・年末年始をのぞく》

「在宅主治医を紹介します!」

徳島市医師会では、訪問診療をうけたいが、在宅主治医が見つからず困っている方のために、46の医療機関で在宅医療を提供するネットワーク：徳島市医師会在宅医療ネットワーク（通称：TIZI-NET）を構築し、在宅主治医を紹介しています。

「ずっと家で過ごしたい」、「一時的にでも家で過ごしたい」とのご希望に少しでも添えるようサポートしています。

～新型コロナウイルス感染症対策を万全にして対応しています～

お問い合わせ先：徳島市在宅医療支援センター　TEL：088-625-3960　FAX：088-625-3965

徳島市医師会ホームページにて、徳島市内にある在宅療養支援診療所の所在などを公開しております。是非ご利用ください。

https://www.tokushimashi-med.or.jp/zaitakuiryo/